

国語 二一一	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文①	名前	年	組	番	取り組んだ日	月	日
-----------	-------------------------	----	---	---	---	--------	---	---

げんだいごやく
現代語訳 (例)

まくらのそうし
枕草子

せいしょうなごん
清少納言

春は明け方がよい。だんだん白くなっていく山ぎわの空が、少し明るくなって、紫むらさきがかった雲が細くたなびいているのがよい。

夏は夜がよい。月のころは言うまでもないが、月のない闇夜やみよでもやはり、蛍ほたるがたくさん飛びかっているのはよい。ただ一ぴき二ひきと、かすかに光りながら飛んでいくのも、しみじみとしてよい。雨などが降ふるのもよいものである。

秋は夕暮ゆうぐれがよい。夕日が差して、山にとても近くなったところに、鳥からすがねぐらに行こうとして、三羽四羽、二羽三羽などと、急いで飛んでいく様子までしみじみとしたものを感じさせる。まして、雁がんなどが列を作っているのが、とても小さく見えるのは、たいへん味わい深いものだ。日がすっかりしずんでしまつて、風の音や虫の音などがするのも、言い表しようがなくよいものだ。

冬は早朝がよい。雨が降っているのは言うまでもない。霜しもが真つ白なものも、またそうでなくても、とても寒いときに、火などを急いでおこして、炭すすを持ち運ぶ様子も、たいへん冬らしい。昼になって、寒さがやわらいでくると、火桶ひおけの中の火も白い灰はいが多くなつてきて、よくない。

国語 一一二	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文②	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

げんだいごやく
現代語訳 (例)

たけとりものがたり
竹取物語

さくしゃふめい
作者不明

たけとり おきな
昔、竹取の翁とよばれる人がいた。
翁は、野山に分け入って竹を取っては、
いろいろな物を作るのに使っていた。
名前を「さぬきのみやつこ」といった。

ちくりん
ある日のこと、その竹林の中に、
根元の光る竹が一本あった。
不思議に思っちかよて、近寄ちかよって見ると、
筒つつの中が光っている。
それを見ると、手にのるぐらいの小さな人が、
とてもかわいらしい様子ですわっていた。

国語 一一三	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文③	名前	年	組	番
取り組んだ日					
月					
日					

現代語訳 (例)

へいけものがたり
平家物語

さくしゃふめい
作者不明

祇園精舎の鐘の音は、「全ての物事は移り変わる」ということを
 人に思い起こさせる響きがある。沙羅双樹の花のすがたは、いきお
 いのさかなる者もいつかはおとろえるという道理をしめしている。
 おごり高ぶる人も長くは続かず、ただ春の夜の夢のようにはかない。
 強い者も最後には滅びる。まさに風にふき飛ぶ塵と同じである。

※「平家物語」は、平家とよばれる武士の一族が、栄え滅んで
 ゆくさまを書いた作品です。作者は分かっています。

つれづれぐさ
徒然草

けんこうほうし
兼好法師

することがなく、たいくつであるのに任せて、
 一日中、硯すずりに向かいながら、心に次々とうかんで消えていく、
 とりとめもないことを、なんとという当てもなく書き付けていると、
 みように心がみだれて、落ち着いていられない。

国語 一一四	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文④	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

現代語訳 (例)

おくのほそ道

松尾芭蕉

月日は永遠えいえんの時間を通り過ぎていく旅人たびびとのようなものであつて、来ては去り、去つては来る年々も、また同じように旅人である。(船頭として)舟ふねの上で働いて一生を送り、(馬方として)馬うまかたのくつわを引いて年をとつていく人々は、毎日の生活が旅であつて、旅そのものを自分のすみかとしている。昔の人の中にも、多く、旅の途中とちゆうでなくなった人がいる。わたしもいつのころからか、ちぎれ雲が風かぜに誘さそわれていくように、旅心たびこころをそそられて漂泊ひょうぱくの思いがやまず、(近年は、)海辺うみべの地方をさまざまに歩き、去年の秋、川のほとりの粗末そまつな家屋かおくに(帰つて、)くもの古巢ふるすを払はらつて、しだいに年も暮くれたのだった。(しかし、)新しい年になると、春がすみの立ちこめる空のもとで、白河しらかわの関せき(現在の福島県にあつた。)を越こえたいと、そぞろ神かみが乗り移うつつて心をそわそわさせ、道祖神どうそじんが手招てまねきしているような気がして、取るものも手につかない。

もも引きの破れやぶを繕つくろい、かさの緒おをつけかえて、三里さんりにおきゆうを据すえる(など旅支度をする)と、松島の月のことが気になるばかりで、(帰れるかどうかも分からない旅だから、)今まで住んでいた家は人に譲ゆずり、(弟子の)杉風さんぷうの別荘べつせうに移うつつたが、

このわびしい草そうあん(芭蕉あん)も住む人が替かわり、

(ちようど三月でもあり、)ひな人形ひななづなが飾かざられる家となることだよ。

表八句おもてはつくを連ね、(記念として、)いおりの柱かに掛かけておいた。

国語 二一五	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文⑤	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

現代語訳 (例)

春暁

孟浩然

春の心地よい眠りに夜が明けるのも気がつかなかった
外のあちらこちらから鳥のさえずりが聞こえてきた
昨夜は風と雨の音がだいぶ激しかったが
花はどれほど散ったことだろう

絶句

杜甫

水は緑に澄んで白い鳥がいよいよ白く見え
山は青々と色づいて咲いている花はまるで
燃えているようにあざやかだ
今年の春もみるみるうちにまた過ぎてゆく
いつになったら故郷に帰れるだろうか

国語 二一六	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文⑥	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

現代語訳 (例)

論語

聞一以知十

一を聞いて以って十を知る。

【訳】

一つのことを聞いただけで、十のことをさとする。

子曰温故而知新可以為師矣

子曰はく、

「故きを温めて新しきを知る、以って師となるべし。」と。

【訳】

先生（孔子）が言われた、

「昔のことをじっくりと学んで、そこに新しい考え方を見つけ出すことができれば、人の師となれるだろう。」と。

※論語とは、中国の古代の思想家である孔子と、

その弟子たちの言ったことや行ったことを記録した書物。